

岡島喜久子

OKAJIMA Kikuko

日本女子プロサッカーリーグ WEリーグ 初代チエア

二〇二一年九月に開幕した日本初の女子プロサッカーリーグ「WEリーグ」。その初代チエア（理事長）を務めた岡島喜久子さんは、女子サッカー黎明期れいめいに選手として国際大会に出場したアスリートのキャリアと、金融機関で三八年間活躍したビジネスパーソンのキャリアを併せ持つ人物だ。サッカー界でも金融業界でも女性というだけで行く手を阻まれそうになったが、情熱と行動力でいわゆる「ガラスの天井」を突破した。これまでの歩みを振り返っていただいた。



取材・文 小堂敏郎

写真 野瀬勝一

「ガラスの天井」を壊す力

日の丸を「袖」につけて 戦った初の国際試合

——岡島さんは一九七〇年代から日本女子サッカーのパイオニアとして活躍されましたが、どのようなきっかけでこの競技を始めたのでしょうか。

岡島 サッカーは中学生で始めました。小・中学校一貫の東京学芸大学附属竹早中学校に通っていましたが、小学校時代にドッジボールと一緒に遊んでいた男の子たちが中学校でサッカーをしているのを見て、私にもできないはずはないと。サッカー部の顧問にお願いしたところ、すぐ入れてくださいました。でも、女子は試合には出られないので、『サッカーマガジン』でFCジンナンという女子チームの募集広告を見つけて入ったんです。当

時、女子チームは東京に四つぐらいしかなくて、試合相手を見つかるのも大変でした。

——サッカーにどのような魅力を感じたのでしょうか。

岡島 純粹にボールを蹴るのが楽しいし、サッカーが大好きな人たちとプレーするのも楽しい。FCジンナンで練習しながら、高校のサッカー部のマネージャーや男子の試合の審判もしました。中学も高校も本当にサッカー一筋でしたね。七七年には台湾で開催されたアジア女子選手権にFCジンナンのメンバーとして出場したんです。

——日本の女子サッカーにおける初の国際試合でしたが、FCジンナンは日本代表として出場

できなかったそうですね。

岡島 日本サッカー協会に女子チームは登録されていなかったからです。当時、アジアサッカー連盟から日本サッカー協会に「女子の大会を開くから参加してほしい」と手紙が来ていたようですが、女子の登録チームがなかったのでも「いないもの」として扱われていたのです。私たちは協会と交渉し、大会参加を黙認してもらったんです。ただし、「協会に登録していない単独チームでの参加だから、胸に日の丸をつけられませんか」というのが条件でしたので、仕方なく、袖に日の丸をつけて戦いました。

驚いたのは、どの対戦相手も代表チームだったこと。国旗を胸につけているんです。マレーシア、シンガポール、タイ……サッカーの強国でもないのに、女子サッカーがちゃんと認めら

れているんですね。そんな相手と戦って、私たちは全敗。大会期間中に選手同士で仲良くなり、私は英語が急に上達しましたが、成果はそれくらいでした。

大学は早稲田大学の商学部に進学しました。実家が呉服問屋で、経済を身近に感じながら育ったからです。一方で、日本サッカー協会で四年間アルバイトを続けました。女子の日本代表チームをつくりたいという思いからです。協会の中の人からいろいろ話を聞くと、まず受け皿が必要だと分



FCジンナンでプレーしていた頃(本人提供)

(注) Letter of Credit。国際的な貿易取引において、銀行が作成する支払いの確約書。

外資系銀行から国際証券会社へ 迂回して花開いたキャリア

かり、それなら女子サッカー連盟をつくらうと。当時、女子サッカー部を創設した三菱重工の方々も力を貸してくださり、実現しました。私は下働きに奔走したことが認められ、連盟の理事の一人に選ばれたんです。現役サッカー選手、サッカー協会の学生アルバイト、そして日本女子サッカー連盟理事。三つを掛け持ちすることになりました。

日本サッカー協会が女子選手の登録を始めたのは七九年。約九〇〇人、五〇チームが登録し、全国大会も始まり、八一年には初の日本代表チームが結成されました。私はその頃、アメリカに留学していたので、代表チームには入っていないんです。チームの初戦を見ることもできませんでした。思いは現実になるんだと身をもって知りました。

ぐの頃でしたから。

バックオフィスの経験だけでは将来しつかり仕事を続けられないと感じていました。審査業務などのトレーニンングを受けたいと幹部になれないと同僚からも言われました。そこで「社内でのニューヨーク研修に行かせてください」と手を挙げたんです。それまでずっと男性が選ばれてきて、その時も男性の候補者がいました。でも彼は英語が苦手。それをアメリカ人の上司が不安に感じていた。結局「すごく行きたいんです！」と英語で訴える私に変更してくれたんです。

研修は厳しかったですね。コンビニア大学大学院の先生が会計学やコーポレートファイナンスなどを一年間教えてくれるのですが、試験で七〇点を取れないとクビになる。でも私、競争する場に置かれると自然と頑張ってしまうんです。

——せっかくアメリカで切磋琢磨^{せつさく}していらしたのに、日本に戻られてから、そうした能力を發揮する機会が与えられないということにならなかったのでしょ

うか。

岡島 なったんです。当時の日本では、女性はアナリストの仕事ならいいけれども、法人向けの営業を任すことはできないという雰囲気がありました。そこで、私は営業職を希望して国際証券(現・三菱UFJモルガン・スタンレー証券)への転職を決めたんです。証券を選んだのは、私自身も株式投資についてよく知りたいという気持ちがあったからです。また、大手の証券会社は英語のできる優秀な男性がたくさんいて、女性は戦力として見られていないと感じました。

——早稲田大学卒業後、就職先は外資系のケミカルバンク(現・JPMorgan・チェース銀行)を選びました。

岡島 最初はアディダスとかプーマとか、サッカー関係の企業を志望していましたが、チームへの商品納入等の仕事もあるので日曜日が休みじゃないんですね。当時、日本企業では土曜日も半日仕事がありました。私は、土日はサッカーの練習や試合がしたい。それができる就職

先として外資系の銀行にしたんです。

配属先はバックオフィスでのオペレーション。L/C(信用状)

(注)のアドバイスなどを担当していました。ただ、銀行で一番大きな仕事といえはお金を貸す仕事です。お客様は日本の生命保険会社や商社が中心で、カウンターパートは皆、日本人の男性。女性がそういう場へ営業に行くことはほとんどありません。男女雇用機会均等法ができてす



メリルリンチに勤務していた頃(本人提供)



おかじま・さくこ ● 1958年東京都生まれ。中学生からサッカーを始め、日本初の女子クラブチーム・FC ジンナンで選手としてプレー。77年のアジア女子選手権（現・AFC女子アジアカップ）への参加を機に代表チーム作りに奔走し、79年には日本女子サッカー連盟初代理事となる。83年に早稲田大学商学部を卒業。外資系金融機関であるケミカルバンク（現・JPモルガン・チェース銀行）東京支店に就職。同年に日本女子代表チームの選手として広州女子国際大会に登録。84年以降は日本女子サッカー連盟の事務局長、代表チームの主務としても活動。88年に営業職を希望して国際証券（現・三菱UFJモルガン・スタンレー証券）に転職。翌年に海外へ転勤となったことを機に現役選手を引退。その後、アメリカに移住し、リッグスバンクやメリルリンチ（現・バンク・オブ・アメリカ）といった大手金融企業を渡り歩き、国際金融の現場で活躍した。2020年7月に日本女子プロサッカーリーグの初代チェア（理事長）に就任し、「WEリーグ」を創設。22年9月、任期満了をもって退任。

女性にも活躍の場を与えてくれる準大手の国際証券で頑張ろうと考えたんです。

私は国際証券で初の総合職中途採用でした。まず債券のトレーディングルーム、それから株式のトレーディングルームで仕事をしました。その頃からサッカーより仕事が面白くなってきて……もちろん、プレーは続けていましたが、練習や試合より仕事を優先する時も出てきて、次第に仕事にのめり込んでいったんです。—— キャリアを形成していく道

は一つではない、壁に当たったら無理に越えようとせずに迂回することも考えてみよう、岡島さんはかねて指摘されていたっしやいます。

岡島 私自身、男性が圧倒的に多い金融業界の営業職に就こうとすると、すごくハンデがあったわけですね。ニューヨークで勉強してきても希望が通らなかつたり、転職しようとしても大手の会社には相手にされなかつたり、私はやりたいことのために迂回せざるをえなかつた

といえるかもしれません。

ただ、そうやって国際証券に入ってみたら、女性であることが大きなメリットになったんです。外国法人部の所属で、アメリカやヨーロッパのファンドマネジャーがお客様でしたから、その営業担当に男女は全然関係ない。むしろ、日本人で女性の私は珍しがられ、アポを取るまでに普通は一カ月待ちという忙しいお客様が次の日に会ってくださったりしました。そうしなければこつちのもので、私はアナリストのバックグラウンドがあるから良い銘柄を発掘できるし、英語で説明したり意見交換したりすることもできます。国際証券の営業が何年通っても注文を取れなかった大きな会社から、私は一週間で三〇万株とか五〇万株の注文をもらうことができました。六〇人いる営業のうち、トップセールスになったんです。

—— 八九年にサッカーを引退、九一年にはアメリカ人のご主人とメリーランド州のボルチモアに移住され、二〇一九年まで現地の複数の金融機関で勤務され

ました。環境を変えながらステッブアップされたところが凄いと
思います。

岡島 目の前に選択肢が二つあったときに、私は、どっちが得か、どっちが損かという目線では見なかったんですね。どっちが楽しそうか、どっちが好きかで選んできました。そうすると自分の選択に責任を持つことができるし、一生懸命になることもできます。一方で、得かもしれないけれども嫌なことは続かないと思うんです。

判断力を磨くために、本を読むことのほか、仕事をちゃんと身につけていくことも大事だと思えます。私の場合、企業を渡り歩いてきたように見えるかもしれないませんが、三八年間身を置いたのは金融の世界だけです。その中で営業を経験して強く感じたのは、お客様は「誰を通じて投資するか」を重視しているということ。アメリカに移住した後は、ファースト・ナショナル・バンクからリッグスバンクに移り、さらにメリルリンチ（現・バンク・

オブ・アメリカ)に移りましたが、お客様は私についてきてくださった。アメリカの富裕層の方々はいくつかの投資銀行に少しずつお金を預けるのではなく、一つ

のところに全財産を預けて資産運用してもらいます。だからこそ、私自身を信頼してもらわないといけません。私はメリルリンチ時代にCFP(Certified Financial Planner)の資格も取りました。お金の相談に乗る力をもっと鍛

ジェンダー平等の理念を推進する「WEリーグ」

——女子サッカーの選手として、また金融業界の営業職としても実績を残された後、女子プロサッカーリーグのチェアという新たなチャレンジをされました。岡島 日本女子サッカーへの愛です。あと、私以外に誰がやるんだと、そういう気概もあってお引き受けしました。サッカー協会の女子委員会には、初代チェアは元女子サッカー選手であつてほしいという気持ちがあると聞き、ビジネスの経験もある

えて、お客様から「この人じゃない」と思っていただけける存在になるうとしたのです。

——「自身のキャリア形成を振り返って、メッセージをいただけますか。」

岡島 女性の潜在力は貴重な宝です。人口減少が見込まれるわが国ではなおのこと、そう思います。女性が輝ける社会をつくることは国や企業にとって必ず力になるはずで

私でお役に立てるならと思ったのです。

でも、コロナ禍の最中にリーグを立ち上げるといのは本当に大変でした。日本初の女子のプロリーグをつくるわけですから、最初は手探りです。スタッフみんなど力を合わせて無我夢中で進めました。他の女子競技団体からは「女子サッカーがこけたら、日本ではもうプロリーグはできない」と言われましたが、一年目に全一一〇試合がで

きた。そこは一つの成果かなと思っています。

——「WEリーグ」という名称にどのようなメッセージを込めたのでしょうか。

岡島 WEはWomen Empowermentの頭文字です。サッカーは日本では男子のスポーツなんですね。現在でもサッカー協会の登録選手数は男子が九四%、女子は六%。数が圧倒的に少ないので女子選手は初めからジェンダーの壁に当たるわけです。例えば、同じクラブにプロとして所属していても、男子選手には素晴らしいクラブハウスが提供されるのに女子選手にはないとか、男子選手は天然芝のグラウンドで練習できるのに女子選手は人工芝だとか、そういう差が日常的にあります。

でも、女子選手たちはそれらをジェンダーの問題と認識していない。女子選手たちが子どもの頃に教わってきた指導者は大半が男性です。「男子ならもっと速く走れるのに」といった目で女子を見てしまう。そういう指導者の態度にさらされて大人になった女子選手たちは「男子のJリーグが

稼いだお金で私たちもサッカーができてい」などと考えたり、自分たちがそれほど重要な存在ではないと思ったりしがちです。WEリーグではジェンダー平等・女性活躍を理念に掲げました。それを前に出していくことで、まずは女子選手たちをエンパワメント(力づけ)してあげたいと私は考えたのです。

ただ、そのように理念先行でサッカー以外の部分にも力を割いたことに対しては、短期的な成果を上げるのは難しいとも感じました。クラブにとっては試合で勝つこと、試合ごとに観客を動員することが大切で、ジェンダー平等のような理念を浸透させるには時間がかかると思います。私は(二〇二二年九月末に)任期満了でチェアを退任しますが、WEリーグはジェンダー平等・女性活躍の理念を引き続き大切にしてもらいたい。そして私も、引き続き私にできるサポートを続けたいと思っています。

——本日は、ありがとうございました。

(聞き手/情報サービス局長・上口洋司)